

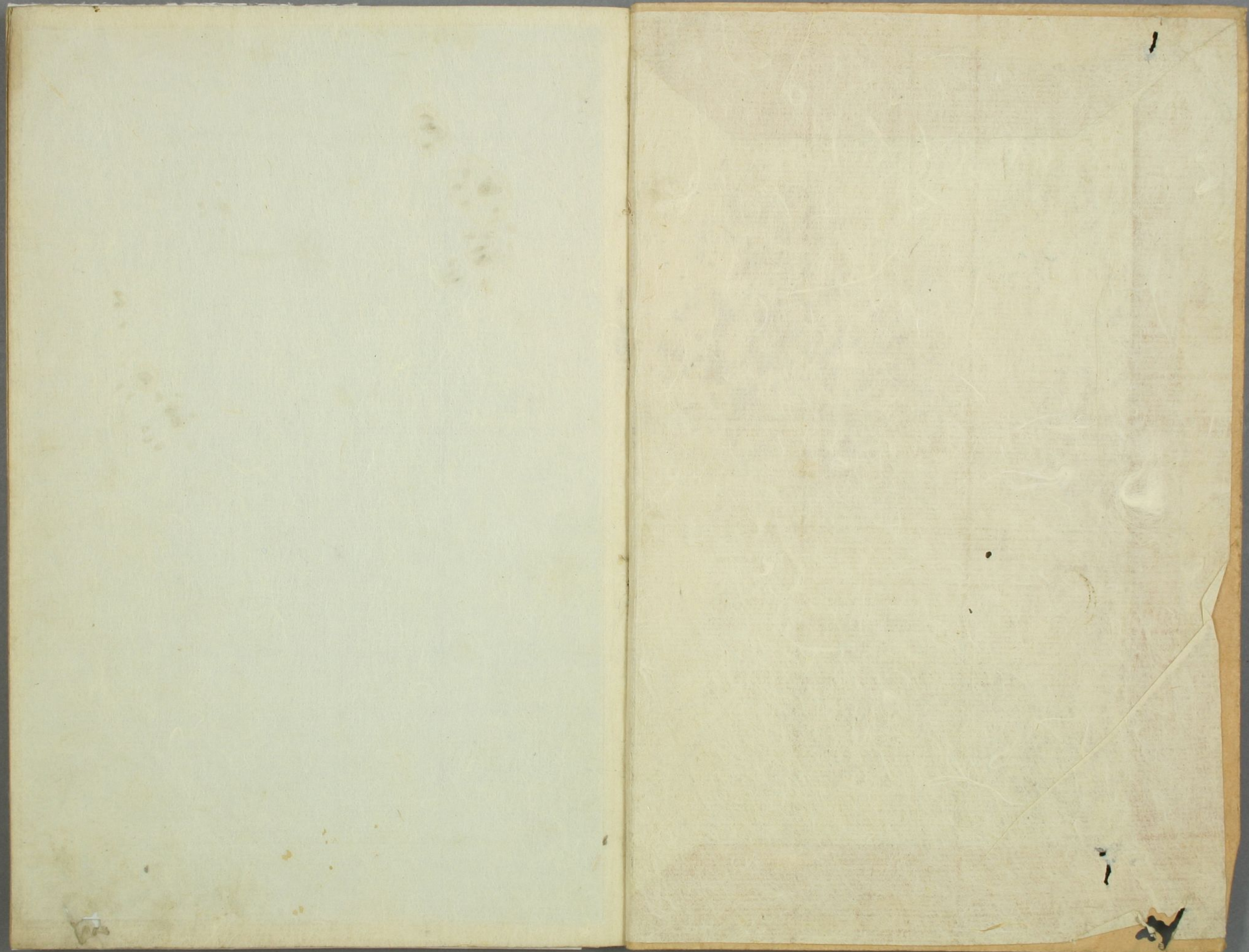
念佛寺家察日記
全

中村俊定文庫

文庫 18

435





二見浦に

玉よりけ二見浦にゆかりの影うら

樽良

全

喜海原のまじりし神乃清色うら

昔坊

神乃清色しうつらうらまふ

樽良



念佛寺衆寮日記

十月廿五日月乃ゆのりし
はるかにけしきよくまきさう
ゆら風ゆる



月寒ししき乃松風吹りし

龍石
虎國

枯木秋の戸しき乃文ゆ

大りしきし君の車ゆ守り長

神志先しき乃かたけゆ

旅は捨てておぼろしくはなれむ

五百の銭とけりてはるる

吾らちるさくしふ令埋るん

身もまはる花乃香をとりてはる

一心乃さくしりハ世をこのりけはる

おねの文はるしりもり院

神風や伊勢の巾被のたぐりし

こそもちりし秋のさらし

い福うしに妹のおまねのあす

うきハ嵐のあすす

朝有りし月小右のあす死

あつし山北のゆふ暮

あまや遊ばれしゆふ

ゆふハ向く乃玉

能言のあす角前あす

あまのあす

まろや丸く曇る空のうら

白く新島六月乃空

山門乃夜籠二行不立若山

庫下に粥の桶運ひりり

うめあひの啼ほら夢の跡は

昔舟のゆき月夜に

子り別の空すいりあはれ

うねりあはれりりりり

浴室のゆれし縁君健長

十六の井い石の草

免らりおふちきりりりり

道いくと橋の歌乃おま

味酒の三杯の山姥の

なほのゆきりりりり

縁りりん若かりりりり

うねりゆきりりりり

蝶々首跡月出をとくしつゝのそん

三年八室ふんく酒のす

ひまふふ〜嫁の輪の黒白あふ

中ハ縁に秋の月うけ

ふさふさ手て窓も花の標をぬ

母妹や鶴人まにふあ風

海を〜山嶺の村あは山そ

善きうれ早ふああ晩

餅に折ん竹の葉さちう〜あかき

と酒ふふはさ〜ハミな坊さあり

さ中になあれさうあ甲斐の人

はの酒乃良あれあ

板舟り振あふ〜寒月に

管の延ああふらあ

母乃あ〜あ〜あ〜あ〜あ

原大禪州橋送くあ朝

地野子の鼻は市に〜

板れまひ〜戸の〜

背戸門の鼻の〜

石の主〜

于新の錦旗〜

市の浮り〜

か〜の〜

中橋東の酒の〜

竜石 十六句
市國 十六句

晴〜の〜

西の〜

兵牛の〜

〜の〜

夕月の〜

夢〜

市國

霧父

竜石

國

宗君

石

富士乃や海小秋乃中山清見寺

進之居れてハ銘の言つ

嫁来しく移ひに来くらま月言れ白

さよと強ひて籠り候之れ

まの柳の多由強画に書戯り

石の鬼係一の秘甚あし

石 居 國 石 居 國

又

水仙り色ひを流居おき此水

うさねら神の時雨味一よ

馬りのりころあくらいささつ

君の入都の時のふさつ

月うけまふふふふふふふふふふ

石の玉をいれなむりりま

桃 季
竜 石
市 國
茶 州
袋 布
季

神ささしよ

御和いつれを新く其禮うしむ

南河

先さちと交のいりめりまらさうよ

南畝

高相めうく相く其まら御さうん

蚰口

御和まをちうまけし御さうん

滄州

誰人乃つあれちのちたん御さうん

逸漢

うし高くも家門通う御さうん

素後

尺送うや月白ふ其のちちさうん

袋布

ちちさうんや其のち尺く御さうん

新石

うし高くも家門通う御さうん

素後

寒風の雨乃ぬれ其のち

竜石

保りきた啼めまひまら院

逸漢

月御向うと白くその形

南河

さうに其まは風吹く

南畝

流水の音の耳にまら

滄州

山深く深き外に遊ばず

酒の味もたに方なきは家

おのれや小貝贈りて思ふて

娘さんふりてあはれをすな

ふあの大由丸た大もふ

心算のあはけき書が山幸

のこの富士のうらみん支那の

新々新の神はうらみ

岩布

剛口

石

州

河

畝

漢

河

支那の南河に松葉のりて

君の心算の花とあはれ

散入のこころはあはれ

うらみはあはれ

石

州

河

漢

高相月二日

年國
竜石

風吹れ——朝日乃生——の栞尾花

浦に波——あつた山

~~~~~田子海~~~~~

我の身——とこしけをち——

秋を峰——と月に入の空

空に星の光たつた空

~~~~~松乃武蔵君らあはれ玉

大に良北洋にう——の海——

母にたつたうらみの信の空真実

布如きなりあつた出——

川に流れた木のさく人に肝の空

探の人を橋にうつた

あつたや秋の空あつた空に

~~~~~平北物集北時~~~~~

まうたの〜 今も白く花の月

信に身をまわし〜 花の影を

花に花を留人に情を〜 花の影

昔はうけつら〜 海は春の

鳥来〜 現乃あまたに陰果〜

親子まゝ〜 船はつあり

長刀はま〜 堂は〜 くに

三日月と〜 花はつあり

ほつりその風をまを〜 前には

花の海の海はお〜

暁の波ふ〜 海は

八千代は〜 浦は

白鷺の音は〜 花の影

乞食と〜 二の

月影〜 流は〜

お節〜 合柳の

車より善く美人のねまじや

きゆふおもひの錦ほらむ

ゆりし流し小村雨をきりて

浪天のむしの梅ちうりし

花のそけり柳のひたひた

春の月よりかきしる

帝のちり玉増縁に

室月水に交るる

亦

塔のれりしうり

名を時雨と老を

天目とこれの酒を

遠くしる

吳 潮

龍 石

竜石

吳 潮

石

潮

明月は傾也よかをとあつ

初よりあつきの旅を廻りし

あつたれ〜嵐水神を秋さふり

まゝあつきのあつたれ〜

石 潮 石 潮

又

ひさかたあつきの嵐の栴尾石

竜石

あつたれ〜あつたれ〜あつたれ〜あつたれ〜あつたれ〜

花 紅

あつたれ〜あつたれ〜あつたれ〜あつたれ〜あつたれ〜

石

あつたれ〜あつたれ〜あつたれ〜あつたれ〜あつたれ〜

紅

朝月此上乃らあつたれ〜あつたれ〜あつたれ〜あつたれ〜

石

あつたれ〜あつたれ〜あつたれ〜あつたれ〜あつたれ〜

紅

あつたれ〜あつたれ〜あつたれ〜あつたれ〜あつたれ〜

石

あつたれ〜あつたれ〜あつたれ〜あつたれ〜あつたれ〜

石

あつたれ〜あつたれ〜あつたれ〜あつたれ〜あつたれ〜

紅

あつたれ〜あつたれ〜あつたれ〜あつたれ〜あつたれ〜

石

竹の緑をうらむに唯あそび

一日本を北浦よりしるしをた

眼指乃柄の束の目ちまひりつ

うらまののくにそとをた

昔の保を過るゝ文社のる

——・更らるゝ川海をこ

月暮りにたるの都のふらふら

礎とらるゝのち——に籠居

石 紅 石 紅 石 紅 石 紅

うけあつたのまは福なりとる男昔

あまのあはれは日知にこころ

野や山のりゝを福してほのけ

——に海——まの松風

月をこけうらあそび裁り

極へるゝれをたあつた

むつほ——のらるゝもまゝあそび

い——うらむ後雪のり保の

石 紅 石 紅 石 紅 石 紅



中川や極道のあはれはさうり

あま〜瓶をねえ〜あまり

〜我に中坊ももやう〜あま

こ〜の〜あまのあまのあま

宇治さ〜ハ橋ふ入ハ日のあま

あまのあまに瓶のあま

瓶のあまや瓶のあまのあま

あまのあまのあまのあま

石

青白

石

紅

紅

石

紅

石

あり紙拾ふ〜あまのあまのあま

あま〜りあまのあまのあま

あま〜りあまのあまのあま

あま〜りあまのあまのあま

あま〜りあまのあまのあま

あま〜りあまのあまのあま

又

紅

石

茶州

市國

竜石

三花色に~~~~~サバ小ぼまの四葉の書

聞詩

沢の朝日~~~~~ちりりの~~~~~

虎國

ほろろの~~~~~に~~~~~さ~~~~~

青白

ゆ~~~~~の~~~~~ぬれ~~~~~

龍石

~~~~~の~~~~~に~~~~~白~~~~~月~~~~~の~~~~~ゆ~~~~~

素後

~~~~~ゆ~~~~~の~~~~~消~~~~~の~~~~~秋~~~~~乃~~~~~

白

又

真~~~~~ゆ~~~~~の~~~~~花~~~~~の~~~~~

花紅

~~~~~ゆ~~~~~の~~~~~花~~~~~の~~~~~

竜石

松~~~~~丸~~~~~の~~~~~面~~~~~の~~~~~

紅

~~~~~ゆ~~~~~の~~~~~花~~~~~の~~~~~

石

~~~~~ゆ~~~~~の~~~~~花~~~~~の~~~~~

紅

~~~~~ゆ~~~~~の~~~~~花~~~~~の~~~~~

虎國

~~~~~ゆ~~~~~の~~~~~花~~~~~の~~~~~

青白

~~~~~ゆ~~~~~の~~~~~花~~~~~の~~~~~

國

武内のお茂の直に神ふれや

白

今川地勢の成そえたるまふ

茶州

哲ものうに踊ふれ報所福よ

御風

あふれ神の目よちほひつ

乙席

又

少夜——うれまの性どあけり時を也

麻奈

あけりまれの招きあふまを

竜石

おう——くま市に女湯の星を

御風

石東中に交りくまを

帛國

松の千代さか人ももさく夏の月

國

二階に涼ぶ飾をふりまけ

風

申の風よ船入くまの下の梅を

國

こひせ——人のあまのまを

宗居

妹——ふささき——くまのあけ

青白

雨おの花よりあける言を

國

静かな雨の凌ぎまじり花鳥

二日の月のさゆり深きよふ

さゆらにうきぬ昔胡麻かへ

くろ結世信くまへ乃あゆむ

顔石師乃宿名ゆけ

神子海木の葉も娘くろの庵

味曾新炊子一室さゆりあられ

國

白

乙 序

風

珊瑚

竜石

おもねあふ旅の影外さゆりに

こころのこころくろの葉のあきら

画硯へ青月の照水さゆり

萩やたを風あふりにまよふ

御風

栗

石

庫國

又

人乃信来流了娘くろの神さゆり

月白くささおはまゆ

御風

樽良

幾もくも移りてはるる山に雲霞月

色くも管のうに汁の及瑞光

瑞光によろぬく顔ゆたつ

茶のり更り追く事家

長閑さなり松林の傍り

腹たふす

花庵

龍石

良

庵

石

我婦の園友亦お新印負へ山人乃花れ

あけに休らとつふまのてんてん

はくその糸乃真更に涼くそのあけあけ

をせぬ園西に去来北城尔如枝梅南に

此由又とあふおま

しとくあけりぬ入お子追追の會のふ

得し種く小昔併其造やをせし碑前

に涙分降く山か

おまねのふんとはなすのき  
あつたはつたつたつたつたつた  
あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた

下

柳良

美とる雪とまはははははは

二十の秋のこころのま

一葉のふゆをふゆに漕出

秋はふゆの風りきり

さん徳もつたつたつたつた

あの本海と雲まはははは

あつたあつたあつたあつたあつた

追く通る僧のふゆのき

茶州 羅父 宗居 野梅 不黙 虎國 坡仄

はゆか探れ娘もよもと福ちほ

命乙

さきまの神井もよもやこもねね

秋叶

山雲も芽のさりのひのち

坡仄

梅うちかはれま奴りよ

樗良

拾枝子田錦にすくふ春の風

不斂

ふきかけくろく治りりまら

宗居

朝をよひ紀は結おうき強きれ

野梅

土間の用紙裏に履何ゆ

虎國

風ゆれく月まほくは神月

茶州

弘通はくまの親おら

羅父

蜀人まき庫のなれお

秋叶

希馬さくくはめく行

命乙

三伏の昼も涼くま

樗良

もろくに滝の中は

坡仄

裸身の中は

宗居

おのり

不斂

竹垣の竹は葉やねさるるはらのさか

虎國

さほり葎のささるるやれ

野梅

緋掃湫の柏子のゆきやまね

命七

向の谷よりささるるのささ

秋叶

各月の園及房の佛に

宗居

今ハ其角のさ路をけ雨よ

羅父

見ゆるさかよし野のむのむみ

坡仄

ささるるのささるる切

樽良

遠く恵方へ人あうよ名のさか

野梅

拾ひしぬ河拾もねり

虎國

あさるるあさるる車と押さるる

不談

柳の糸にもねりささるる

茶川

谷吟

啼初る毎日聞や保さるる

宗居

二三日雨の中ふふ内さるる

野梅



子規の陸子片うつら月夜哉  
水海や雲に啼けはるまじ  
時多し夜のはらふまはるまじ  
倚るまじあはるまじ  
うねの橋山出まじく時多し  
山合や馬の中ゆく倚るまじ  
明けのこゝろ倚るまじ

不歎  
虎國  
蘿父  
坡仄  
爺乙  
茶州  
秋州

宗居  
坡仄  
獨吟

無為菴標良評

あまのくにまはるまじに秋のそら

秋のまはるまじ

各月のまはるまじ

昭徳堂

標良

宗居

誰れも海を舟の角隅中

所にまゝのれはさき

舟傳に波を伝へて

海賊のむしりて果あり

友をみぎに手にさす

南のうけに二階

君をみよむるふもさ

花をみよむるふもさ

月をみよむるふもさ

破れしは

手路をみよむるふもさ

曲突のうけに枕

まじりし雨は

意をみよむるふもさ

友をみよむるふもさ

このれをみよむるふもさ

誰れも海を舟の角隅中

所にまゝのれはさき

舟傳に波を伝へて

海賊のむしりて果あり

友をみぎに手にさす

南のうけに二階

君をみよむるふもさ

花をみよむるふもさ

月をみよむるふもさ

破れしは

手路をみよむるふもさ

曲突のうけに枕

まじりし雨は

意をみよむるふもさ

友をみよむるふもさ

このれをみよむるふもさ

橋に賣りたうと承るひ書後

海子通り時雨馬の

あると地元の駒はあまた

ある時雨小名はたつ松りれ

井の 國 ねんまじり 旦夜

五更よりうく新の事

通盛のやのやとつに能登守

つと洛世信 一人良の巻

月あは山田の編を布出

一編解るるまへ行

五節のたを 神代おり

本形と係りる名中のまり

一編の屋上へるる係り

無心の中水の縁はあまた

一編のこらあまた 即ん石の下

一編のあまた 一人の係

其二

ふりしにきししよめた程のきき

一 歌にききよのきききき

きりの開ふおゆきし程のきき

あゆきしにきききき



いふきききききききき

お小照目のきききき

樽良

坡 仄

子のきききききききき

一 きききききききき

後欄のきききききききき

しきききききききき

大將のきききききききき

一 きききききききき

きききききききききき

母のきききききききき

きききききききききき

岩倉の神田へ行くまじり

いづれに花の難面

草鞋の道は遠く道

あやふらふらあやふらふら

足のかきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかき

虫月堂より白髪納まじり

筆の居る心もももももももも

つれなきことおぼえおぼえおぼえ

一歩の歩みは我が海に

長閑な空の空の空の色

一歩の歩みは我が海に

いづれに花の難面

いづれに花の難面

いづれに花の難面

いづれに花の難面

酒の久小はるるを裁くは雨合し  
 雲に張るれは奇なる  
 産御より魚釣るる涼し  
 五輪の白髪の人  
 何處までも存ハ果てははるる  
 梅に捨る遠近の人

其一

坂仄

異歩の其ふ美らきなり  
 中に雲ら雨のま  
 け山や新に雉子の尾はれ  
 細に携梅運る  
 明けは客打つく印の月  
 雲のうらもひき  
 さられもあ  
 さはまのい  
 ちかふのい  
 るる

竜石  
 青坊  
 袋布  
 石仄  
 坊

續一 一の階よりあがりし

一 一の階よりあがりし

一 貫の階よりあがりし

一 好物の目録といふ

説法 一 一の階よりあがりし

一 一の階よりあがりし

一 一の階よりあがりし

三 一の階よりあがりし

二 一の階よりあがりし

坊 布 仄

坊 石 布 仄

一 一の階よりあがりし

一 一の階よりあがりし

一 一の階よりあがりし

一 一の階よりあがりし

一 一の階よりあがりし

一 一の階よりあがりし

一 一の階よりあがりし

一 一の階よりあがりし

坊 石 布 仄 坊 石 布 仄



盗入、洋紙、おろし、

小袋、足袋、し、り、船の上

初、候、き、西、東、の

う、川、の、ふ、う、つ、に、細、う、ま、孫、に

わ、い、あ、あ、あ、も、ひ、あ、山、坂、の、笑

袋、あ、い、の、あ、ま、の、袋、い、丸、袋、あ

い、く、い、あ、あ、い、い、あ、あ、の、様

布 石 坊 灰 布 石 布 灰

目、後、中、依、入、い、う、家、曲、角



い、い、あ、あ、い、い、あ、あ、の、様

を、の、幕、打、の、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

布 石 坊 灰

其二

梅、の、花、雪、あ、あ、の、い、い、い、い、い、い、い

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

音坊

袋布



埋もぬる玉座の座のふりかへし

岩のあはれはふ人と押合

笛吹く銀葉月に待たれ

魚り船の文子又さうさ

あふ人のあふいと確信

こゝろをさうつくやあはれ

本二のまじりかたつてしき

まのしやうたさかむ

坡 灰

龍 石

坊 布

灰 石

坊 石

坊 石

坊 石

坊 石

あふ人のあふいと確信

まのしやうたさかむ

本二のまじりかたつてしき

こゝろをさうつくやあはれ

あふ人のあふいと確信

まのしやうたさかむ

埋もぬる玉座の座のふりかへし

岩のあはれはふ人と押合

灰 坊 布 石 坊 布 灰 坊 布 石

石坊 灰 布 石 坊 灰 布 石 坊

入りし日の影もくに照り

敵山の夜は流しに味方

精進汁は谷ふ先焚

ついでと申しりれは日もま

雲のかげも白雲ふ返り

多岐父や親父の代もも知ふ

親も長ももは乃思は

強き海馬のつれなきはと

世は世丸のつれなきも

まのつれなきはつれなき

光原とてつれなき

正面は焚きしら焚き

布にのりり鬼のあし

将軍の祥ふ遠れ玉の前

揚国志は誰も憎ら

石 坊 灰 布 石 坊 灰 布 石 坊

石 坊 灰 布 石 坊 灰 布 石 坊

及て介一 大勢ひまゝの  
一 軍ハ物ハにりるものには

其三

仰別りりさちらもつふれは柳哉

一 ちの飛のこゝ園一 つうあり

一 髪の上には布焼巻打刺り

一 髪はふりし路のしつ

石坊

袋布

坡 仄

龍 石

青 坊

一 のいれ乃際ふくまの月也

一 是のいれに 鷲崎の村等ら

一 折さくく色の馬にも格一これ

一 環の袖ふふく色

一 其の奥の奥の館のま別絶

一 音ひくくくくくくくくく

一 白麻のつらつらつらつらつら

一 胡玉乃くくくくくくく

布 仄 石 坊 布 坊 石 仄

木子よ〜柳〜の口〜り〜

禰の取のこ〜り〜

宗宗の取のこ〜り〜

信信の取のこ〜り〜

信の取のこ〜り〜

信信の取のこ〜り〜

大波と〜り〜

大波と〜り〜

石坊布

布

